

風土



思ひ出のやぶ入秋の蚊を打てば

(句集『高蘆』より昭和四十六年作)

「やぶ入」は正月十六日と盆の七月十六日に、奉公人が一日の休暇をもらって親元に帰ることを言います。この句の場合、「秋の蚊」から「盆のやぶ入」と考えられます。「やぶ入」の時、奉公人は主人から衣服や小遣いを貰うのが楽しみでした。親元から遠方の者は東京にとどまり、浅草などの繁華街が賑わったと言います。桂郎師は生粋の江戸っ子ですので、「盆のやぶ入」の浅草を想い起しているのです。「秋の蚊を打てば」に桂郎師のひねりがあります。

さび鮎やぶちまけて爐に炭足せり

(句集『高蘆』より昭和四十六年作)

この句には「岐阜」の前書きがあります。桂郎師はこの年の九月に、岐阜の水野病院で一週間ほど静養しています。病院は「風土」同人の水野吐紫医師が経営しており、その間に「下り鮎」でさび鮎漁を楽しんだようです。「ぶちまけて」に、鮎宿の野趣味のある爐が想像されます。

青竹に水ぶっかけて鉾回す

(句集『貴椿』より平成十一年作)

器師は、祇園祭のころに京都を訪れたようです。祇園祭は七月一日から三十一日までの長丁場ですが、メインは七月十七日の山鉾巡行です。四条通りから河原町通りへの辻、河原町通りから御池通りへの辻に差し掛かると、何トンもの鉾を大勢で方向転換させるのです。大きな車輪の下に割竹を敷き、「水ぶっかけて」一気に回します。うまく回れば大観衆からのやんやの喝采です。優美かつ豪壮な祇園祭の山場を、器師は勢いのある言葉で活写しています。

朝曇り妻へ茶柱ないしよないしよ

(句集『貴椿』より平成十一年作)

「朝曇り」は日中の厳しい暑さの予兆の、霧がかかったような朝のことを言います。器師は亡き妻への仏壇のお茶を欠かしません。お茶をついで持つていこうとすると茶柱がたっているではありませんか。今日は暑くなるけど何かいいことがありそうな。でも位牌の前に置くまでは「ないしよないしよ」なのです。

蟹の穴 南うみを

祭来と鯖の頭を刎ねにけり

大樽にビール百缶ぶち込んで

神輿発つ原発見ゆる入江まで

太刀振りの二人の汗の横つ飛び

砂跳ばし潮踏みしだき祭足袋

荒波も加勢ぞ神輿三つ巴

荒神輿去んでしまひし蟹の穴

木から木へコードの走る祭かな

夜店の灯地べた座りの膝照らす

屏風祭格子に顔を押しつけて

ひと揺れもせぬ船鉾に上がりけり

七月二十六日

おはぐろの庭に来てをり師の忌なり

(俳句) 九月号掲載と重複あり



竹間集

同人作品



ダリア咲く

鈴木庸子

父母と弟待つや盆の道
折りたたむ自転車夏の小海線
枕木を歩道に夏のハーブ園
合併を拒みし役場ダリア咲く
立ち籠める夏霧高原野菜畑
片蔭に入るや一会の道連れに
電卓に税抜き税込み金亀子

スモークツリー

浜 福恵

青但馬巢立ちを迎ふコウノトリ
切れ切れに旅の記憶や水鶏笛
水鶏笛吹いてもみたり杉風忌
川の向ふは狐の嫁入り日雀鳴く
梅天へスモークツリーの立ち上る
硯洗ふ曾祖母ひいばの座を賜ひけり
をのこごや生後七日の星祭

蓮の風

門伝史会

千畳敷の一畳に立つ夏の雲
奥入瀬の響き昂ぶる滝の前
山頂八甲田山に夏霧の音聞きみたり
湧水を引いて涼しき厨かな
縄文の夢のつづきの大賀蓮
声明の坩堝となりし大施餓鬼
てんこ盛りの餓鬼飯光る蓮の風

蓮開く

鈴木石花

自然守る子に富士山の開きけり
薔薇乾してアロマセラピー講習会
読み易き歳時記届く梅雨晴間
青芝に着陸救急へリコプター
矢印を頼りの川辺鮎尽くし
留守の鉢水濁りしに蓮開く
いかづちや「ヤマタノオロチ」演奏会

七月

岩木茂

氷像の鷹は嘴より老ゆる
峰雲や五山に文字の隠れなし
七月や空を揺らして竹あをむ
赤藻屑を干して舟屋の夏百日
漁火の沖見に出づる洗ひ髪
手術日の決まりて妻の声涼し
七夕や機を休める機の町

河鹿笛

小林輝子

午後よりの日を大切と薇干す
夏蕨折る目の先に熊の糞
踏み出しの片足をあげへみ睨む
天道虫だましが胸に飛びつくり
蓴菜にうなづく夫の喉仏
谿風に誘ひ出さるる河鹿笛
朝顔の雨に初花浅縹

器の忌

田村すゝむ

無病息災百万遍の数珠回し
師より弟子に百の伝言吾亦紅
本堂に風を集めてお虫干し
生産者の名を付けて葱送り出す
群衆の想ひ違へて花火待つ
真夏日や空気の抜けた車椅子
満月に近づいて来る器の忌

トロツコ電車

鈴木
石花

道をしへ桐生始発の電車出づ
「溪谷号」てふ一輛や風薫る
碎石場見上ぐ槐の花の下
油照採石場に石切無し
涙拭くハンカチーフや富弘館
和三郎の歌碑に陰おく山法師
青柿や足尾窯場に橋を越ゆ
軒並ぶ炭住街に水を撒く

徴用の慰霊碑寂と草いきれ
赤城へとゆつくり踏むや登山靴
地場産の豊かな恵み夏料理
涼風もここに届かぬ長隧道
草木滝の飛沫を諸の手に受けり
スカイツリーと同じ高さの黄菅山
鉦毒の汚染無き川鮎住めり
渡良瀬のアーチ橋踏み雲の峰
今もなほ無人駅なり百合匂ふ
通し鴨悠々と浮く湖しづか
放水のダムに膨らむ虹の橋
出立の明日は雨とや早星

山河集

同人作品



南うみを選

梶子や月の雫にほぐれゆく
人の世の立入り禁ず夏蓬
先頭はたえず替はりて蟻の列
梅雨明けの空へ大樹の深呼吸
個性なき世代香水日々替へて

岡本 尚子

落人の村を流るる河鹿笛
海の日や津波の砂のある時計
復興の松まだ小さき海開き
潮風に育つ万本松の芯
百人の祓のことば梅雨の海
峰雲や言葉少なき散髪屋
滝落つる音に則ありテンポあり
白雨去り空気の替はる街歩く

森高さとよこ

上村 葉子

採血の順待つ椅子の大暑かな
うかうかと夫と七十路ソーダ水
口重き子の瞳かがやく山開き
高壁に釘の浮きををる大暑かな
涼しさや句作一途の青畳
晚鐘のわたりきつたる涼しさよ
空蟬の箒に絡むきのふけふ
余白なき弘法池のはちすかな
みんみんや数へてみたる子の齡
青柿や臍ひとつつ朝の子ら
屏風祭指置くやうに琴の爪
ことづての重たし無言詣かな

赤石 梨花

雨宮 桂子

風土独語／南 うみを



先頭はたえず替はりて蟻の列

岡本 尚子

「蟻の列」を食い入るように見て得られた作品です。蟻が入れ替わり立ち替わり先頭に立つとは驚きです。社会生活を営む蟻ならではの連携プレーなのでしょう。細かなことを細かに表現することでリアルさが出ました。

半夏生味噌煮の魚に酢を少し

森田 節子

「半夏生」は夏至から数えて十一日目の七月二日ごろにあたります。梅雨の後期にあたり、野菜を食べないなどの物忌みをしたり、豊凶を占ったりしました。作者も梅雨のうっとおしさを乗り越えるために、煮魚に酢を垂らし体調を整えるのです。

復興の松まだ小さき海開き

森高さよこ

この「復興」は東日本大震災後の復興のことです。未曾有の大津波により、作者の住む「いわき」も大きな被害を受けました。浜では何事もなかったかのように「海開き」神事が始まりました。しかし防風・防潮林の松を見るとその幼さに不安がよぎるのです。

滴りのやがて「モルダウ」流れ出す

奥田 茶々

「モルダウ」はチエコスロバキアを流れる川のことです。ただしここではスメタナの連作交響詩「我が祖国」の中の「モルダウ」を重ねています。一滴の水がやがて大河になり、滔滔と流れる様子をスメタナの音楽と共に想像しているのです。視覚と聴覚が融合した世界になっています。

峰雲や言葉少なき散髪屋

上村 葉子

普通、散髪屋は客の話に受け応えしながら仕事をします。しかしこの人物は素っ気なく、必要以上には応えません。愛想が悪いわけではありません。窓の外の「峰雲」のようにどっしりしているのです。

祇園会は耳の奥から始まりぬ

杉本葉王子

「祇園会」は七月一日から三十一日まで長い祭です。そのメイソクが十七日の「山鉾巡行」です。さて「耳の奥から始まりぬ」はわかりにくいかもしれませんが、一か月の長丁場ですので、朝な夕などこかで「祇園会」に関わる音が聞こえてくるのです。京都在住の作者ならではの捉え方です。

空蟬の箒に絡むきのふけふ

赤石 梨花

この句は日常の中で季節をとらえるということを私たちに教えています。毎日の庭掃除に絡まる空蟬の数に、本格的な蟬の季節がやってきたことを暮らしの中で実感しているのです。(以下略)

風土集



南うみを選

半夏生味噌煮の魚に酢を少し

川崎

森田 節子

焚き合はす旬のものかな盆迎ふ

母の手の塩梅のよき胡瓜もみ

切り口を糸一本に水羊羹

麦茶冷ゆ応援団の大やくわん

「安楽」の法話の後のソーダ水

東京

奥田 茶々

留守の間の真菰筵の匂ひけり

明易のパン屋の重き粉袋

辻回し大船鉾が横を向く

滴りのやがて「モルダウ」流れ出す

祇園会は耳の奥から始まりぬ

京都

杉本葉子

白木槿赤き花芯の夕べかな

夏菊の白き香りや母いづこ

かにかくに団扇の風はわれのもの

草刈機草の匂ひを付けしまま

冷しトマト潮垂れの手でかぶりつく

舞鶴

小原美美子

一望す山百合の坂登り来て

臨海学校浜焼匂ふ路地ぬけて

水際に緋鯉あぎとふ薄暑かな

巡行了へ夜風にさらす洗ひ髪

夏空に原発ドームとけあはず

舞鶴

谷田明日香

二度三度羽ばたいて見せ羽抜鶏

瓜抱へ山へ遁走はぐれ猿

ひぐらしのかくも小さき脱け殻よ

干し物に羽虫はりつく早かな

臥竜松の生きる波動や夏旺ん

長岡京

南部 小花

ががんぼや老いひたすらに座敷掃く

西郷どんの行水盥鎮座せり

退院や百日草とバスを待ち

自転車のかごに仰け反り昼寝の児